

行きすぎた潔癖志向が日本人を滅ぼす

「清潔はほどほどに」が自然である

アナタは汚れている——広告の脅しは今日も流れる。
顔を皮膚を部屋を、電子顕微鏡レベルで見ても、きれい・汚いを言う必要がどこにあるのか。
生き物は汚いし、そもそもくさい。それは自然なことのはず。
抵抗力・免疫力を自ら減退させる超キレイ社会のバカらしさ。

免疫学者・東京医科歯科大学名誉教授

藤田紘一郎

●ふじた・こういちろう 1939年中国生まれ。東京医科歯科大学卒業。東大大学院医学系研究科修了。主な著書に『笑うカイチュウ—寄生虫博士奮闘記』『清潔はジョーキだ』『カイチュウ博士と発酵仮面の「腸」健康法』（小泉武夫氏との共著）など。

ウンコの川で遊ぶ子たち

私は今でこそ「寄生虫博士」として知られていますが、最初は整形外科医でした。整形外科と寄生虫学とどこに関係があるのかと思われるでしょうが、実際の関係もありません（笑）。たまたま熱帯病調査団の団長をしている教授とトイレで会い

まして、「調査団の荷物持ちが必要だから誰か探してこい」と言われ、それがウンの尺きとなった。

学生時代に柔道部のキャプテンだったので、「こいつなら屈強なヤツを知っているだろう」と声をかけられたわけですが、結局誰も見つからず、自ら荷物持ちとして調査団についていくことになった。これがきっかけで熱帯病医学の道に方向転換し

ました。

その後、寄生虫学も専門とするようになったのですが、回虫に関心を持つに至ったのは、一九六五年、現地で働く日本人たちの健康調査のために訪れたインドネシアのカリマンタンでの体験です。宿舎とは名ばかりの掘っ立て小屋で、便所も川の上突き出した、これも掘っ立て小屋。現地では排泄物はすべて川に垂れ流

します。ウンコの流れた川で、人々は洗濯をし、口をすすぎ、水を浴び、子どもたちは遊ぶ。

最初は「こんな汚い川で遊んでいたら病気になるちゃうよ」と子どもたちに忠告していたのですが、不思議なことに腸チフスも赤痢もない。むしろ、水道水を使っている大都市ジャカルタのほうが、感染症に罹っている人たちが多かった。つまり「きれい」な水を使っている地域のほうが病気が多かったのです。

水を調べてみると、ジャカルタの水道水は病原菌だらけでした。原水に塩素を入れて無菌にした水を各家に引き込んでいるのですが、その過程で川の水などが混じり、なまじ無菌状態だから病原菌がワッと増えてしまふ。一方、カリマンタンの川の水のほうは、菌はたくさんいるのですが病原菌はそれほど多くない。枯

草菌や土壌菌をはじめ、多種多様な菌がいることで生態系のバランスがとれて、病原菌だけが増える事態を抑えていたのです。

とはいっても川の水に病原菌がないわけではない。それなのに人々はみんな元気で、とりわけ子どもたちは素晴らしく元気だった。ウンコが横を流れていく川で毎日遊んでいるのに、目はキラキラとして、肌もピカピカと黒光りして、日本の子どもたちよりずっと潑刺、エネルギーにあふれていた。

当時の日本はすでに花粉症やアトピーや喘息が増え始めていましたが、そんなものに罹っている子どもは一人もいない。その理由を知りたくて髪の毛や排泄物を調べてみたら、全員に回虫がいることでした。子どもたちが元気なのは回虫にか

思ったわけです。

回虫はなくなっただけ

日本でスギ花粉症の第一例が報告されたのは一九六三年です。その後、六五年から花粉症や喘息が急激に増えだしました。おもしろいことに、花粉症や喘息の増加と寄生虫や結核の感染率は反比例しています。

私が子どものころ、男の子の遊びとしてスギ鉄砲は当たり前、子どもたちは花粉で真っ黄色になりながらスギの実を集めて回ったものです。女の子にもてたかったから、私はスギ花粉をいっぱい集めて女の子の髪にかけて金髪にしてあげたりしました。みんなスギ花粉だらけだったけれど、しかし花粉症なんて一人もいなかった。

お腹の中に回虫がいるのも当たり